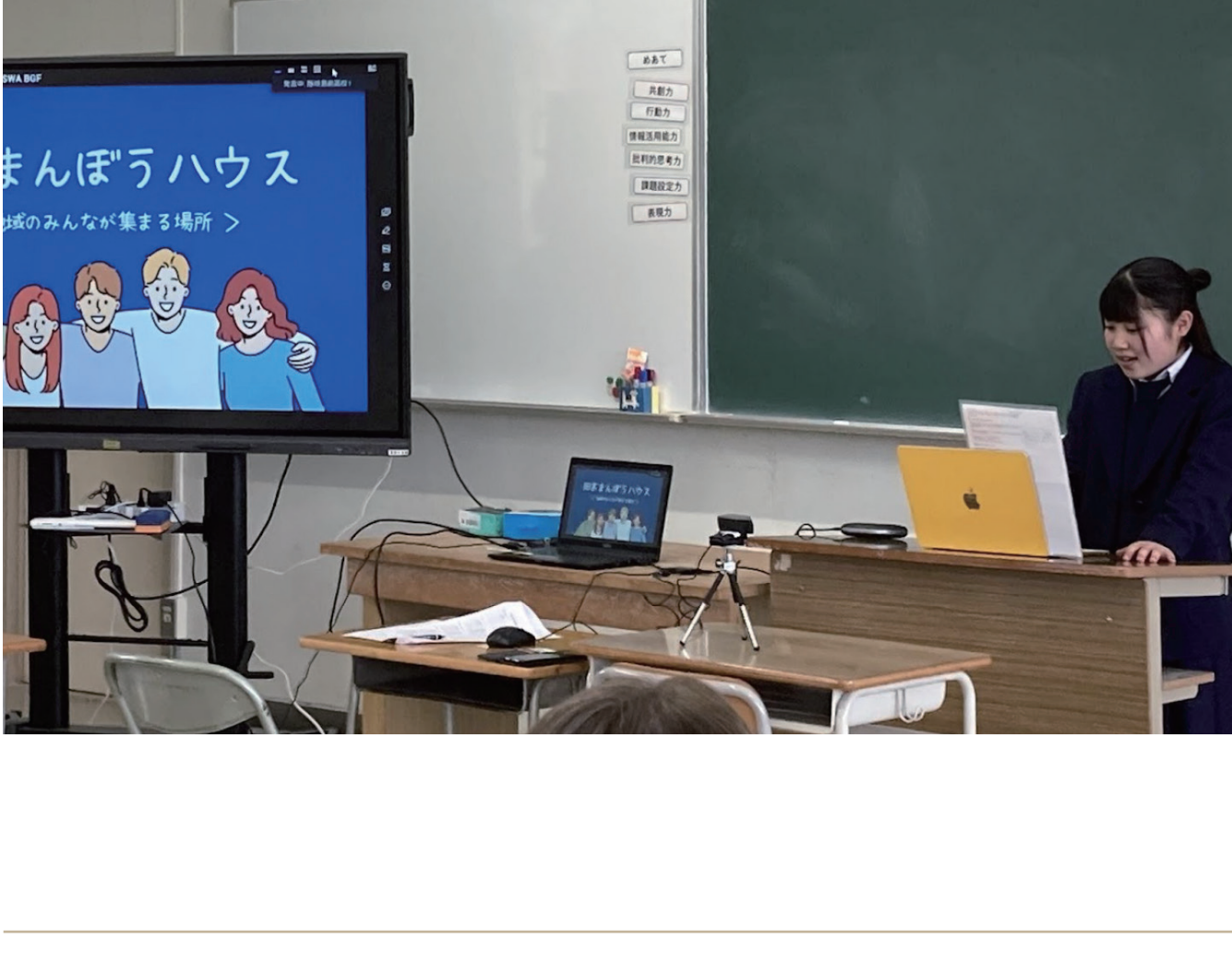




生徒に伴走しつつ、伴走者に伴走する

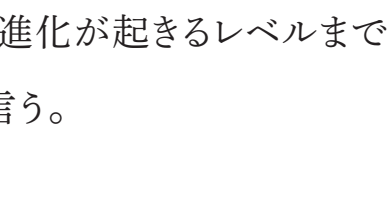
～島根県立隠岐島前高等学校～

取材・文／笹原 風花

長く地域探究に力を入れてきた島根県立隠岐島前高等学校では、2023年度に「地域共創科」を開設。週1回「地域共創DAY」を設けるなど、より地域に根ざした実践活動を進めている。地域共創科におけるプロジェクトや伴走について、コーディネーターの石井香名さんに伺った。

ゼミを通して生徒に伴走し、“そもそも”を掘り下げる

地域共創科の生徒は、1年次の3学期に各自のプロジェクトのテーマ設定に取りかかり、2年次からは4つのゼミに分かれてそれぞれが実践に励む。2・3年次は毎週木曜日を「地域共創DAY」とし、1日丸ごと実践活動にあてる、全国的にも珍しいカリキュラムとなっている。「地域に入り込み、プロジェクトにどっぷりと浸かることで、2年次



には地域に喜ばれるレベル、さらに3年次には地域に変化・進化が起きるレベルまでプロジェクトを深めていくことを目指している」と石井さんは言う。

ゼミのテーマは、「ものづくり・技術」「自然・農林水産」「教育・医療福祉」「暮らし・交流」の4つ。それぞれに教員1人とコーディネーター1人が付き、インターン生がサポートで入ることもある。生徒は各ゼミのプレゼンテーションを聞いたうえで、自分のテーマに合ったゼミや伴走してほしい教員・コーディネーターのいるゼミを選択。基本的には生徒の希望が優先され、1ゼミあたり3～7人が所属する。個人プロジェクトが基本だが、ワークショップの手伝いなどゼミ内で助け合いながら取り組んでいる。

石井さんが担当するのは、「暮らし・交流」ゼミ。1年目は2年生7人が所属し、それぞれのテーマで実践を進めてきた。

「最初のプレゼンで、うちのゼミでは“そもそも”を掘り下げるよ、たくさん壁打ちするよと伝えたので、そこに共感して来た生徒が多いと思います。暮らし・交流って、他のゼミに比べると範囲が広いんですよね。どのゼミにも当てはまらない子の居場所でありたいという思いと、どんなテーマでも当てはまり得るからこそ迷走しないように伴走したいという思いがありました。だから、そもそもどうしてこのテーマにしたのか、何を大事にしたいのか、設定した課題は本当に地域の課題なのか…と深掘りしながら進めました」

生徒に寄り添いつつ地域からの視点を意識する

空き家を活用して地域の人のやりたいことを叶える場所をつくる、図書館と組んで読書や本に親しむ島にする、未利用魚を利活用して食卓に届ける、観光客が島を巡れるよう電動キックボードを導入する、インバウンド向けのホームステイ型ツアーを企画・実施する、島の子どもたちにお金の教育をする……と、「暮らし・交流」ゼミの生徒が取り組むプロジェクトはさまざま。そして、進み方もさまざまだ。

「この人と連絡をとってみたい？ あの人に話を聞きに行ってみたら？と、地域の人とつながることから始めています。例えば、地域の人にアンケートを取りたいという生徒に、島の人が健康診断のために集まる診療所に出向いたら数が集まるんじゃないかとアドバイスしたところ、突撃していましたね」

こうして地域にパートナーが見つかった生徒や具体的なフィールドが決まった生徒は、「わりと早い段階で自走できるようになる」と言う。伴走者の役割として石井さんが最近、その重要性を実感しているのが、「伴走者への伴走」だ。

「生徒と地域の大人たちとの間にすれ違いが生じたことがありました。生徒に寄り添うことに加えて、生徒と地域の大人との関係性を把握し、地域の方々はどう見ていいのか、どう感じているのかを聞くこと。そして、こうしてほしいと伝えることも大事だと実感しています。生徒の伴走者である地域の大人に、いかに伴走するか。これが、今の私の課題の一つです」

一方、自分は何をしたいのか、どうすれば良いのかわからず、アクションを起こせない生徒もいる。

「何のためにやるのか、どのレベルまでできたらいいのかが自分の中で腑に落ちないと動き出せない子もいます。そんな場合は、とことん話し相手になり、考えと一緒に整理するようにしています。とはいえ、地域に出たりいろんな人に話を聞いたりしないと課題ややりたいことは見えてこないんで、生徒の性格や状況、タイミングを見ながら、そういう場をつくるようにしています」

気持ちが赴くままに動いてみるフットワークの軽さを大切に

ゼミでの約1年間の伴走を経て石井さんが感じているのが、「七人七様」ということ。「それぞれに個性・特性があり、状況によっても適切な声のかけ方やタイミングは違ってくる。その見極めが難しい」と言う。例えば、同じように動画を見ていても、ただ目の前の課題から逃げていることもあれば、何かヒントを見つけたくて主体的に取り組んでいることもある。積極的に声をかけるべきか、静かに見守るべきかは、悩ましい。

「もともと知っていて関係性ができている生徒は伴走もスムーズだったので、まずは生徒のことをよく知り、人と人としての関係性をつくるのが大事だと改めて感じました。加えて、進捗を把握しつつ、干渉はできるだけしないことです。私は心配からつい世話を焼いてしまうタイプで、あれはどうなってるの、大丈夫なのと声をかけてしまいがちなので、意識的に自粛しています」

2024年度は、地域共創科の1期生は3年生になり、2期生は2年生になる。7月の最終発表に向け大詰めを迎える3年生については、「ここからどれだけ大きく飛躍できるか、見守りながら伴走したい」と石井さん。一方、2年生には、1期生の反省を踏まえつつ、「もっと気軽に地域に出てほしい」と期待を寄せる。

「“そもそも”を大事にするのがゼミのコンセプトでしたが、“そもそも”を求めすぎたのは反省点です。地域の人の話を聞きに行くという生徒に対して、何がしたいのか何のために行くのかとチクチク聞きすぎたことで、まずは行ってみようというフットワークの軽さにフタをしてしまったなど…。気持ちが赴くままに動いてみて、なんとなく課題感を掴んで帰ってくる。そういう経験も大事だと思ったんです。本校では、日々の授業や中間発表などで振り返りの機会を多く設けているので、生徒はそこで“そもそも”と向き合うことになります。ですからゼミでは、“そもそも”を深掘りしすぎず、外に出てみて感じたことやモヤモヤした違和感を言語化することに力を入れていきたいと思っています」

生徒インタビュー

Interview



島根県隠岐島前高等学校2年生 F・Sさん

自分の意思是、伝えないと伝わらない

「暮らし・交流」ゼミに所属し、「みんなの“したい”をかなえる」をテーマに、空き家を活用して地域の方々やりたいことを実現できる場づくりに取り組んでいます。私の呼びかけに高校生が18人集まってくれて、地域の方の“したい”を叶えるイベントの実現に向けて、一緒に活動しています。

ここに至るまでには、何度も壁にぶつかりました。空き家のある地域の区長さんは私たちの活動に理解があり協力的でした。一方で、空き家を管理されている地域の方々には別の想いもあり、私が想定したようには話し合いは進まず、企画が白紙に戻ったことも。自分の配慮や報・連・相が欠けていたことを反省し、また、「地域の大人」にもいろんな考え方の人がいるんだということを学びました。大人たちに厳しいことを言われたときは相当落ち込み混乱しましたが、コーディネーターの石井さんに話を聞いてもらい、なぜトラブルが起きてしまったのか、関係性を立て直すためには何をしたらいいかを、一緒に考えていきました。

石井さんに言われたのが、「自分の意見を言わないと、何がしたいのかが相手に伝わらないよ。相手もどう支援したらいいかわからないよ」ということ。石井さんの言葉に勇気もらい、思い切って自分の意見を伝えたところ、相手もできる範囲で応援するという姿勢でいることがわかり、イベントの企画を認めてもらいました。この経験を通して、自分が何をしたいのかを相手に伝えないと、逆に困らせてしまうこともあるのだと実感しました。



島根県立隠岐島前高等学校
<https://www.dozen.ed.jp>